

平成二十六年 度

豊島岡女子学園中学校
入学試験問題

(二回)

国語

注意事項

- 一、合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二、問題は 一 から 三、3 ページから 22 ページまであります。
合図があったら確認してください。
- 三、解答は、すべて指示に従って解答らんに記入してください。

一

次の文章を読んで、後の一から十一までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

やりきれない出来事が多発する現代に、生きることの希望を、意表をつくかたちで授けてくれる、絵本を一冊ご紹介します。

あるまちのある大通りにうち捨てられたバス。①行き先表示は、なぜかガムテープで「天国」。幼い女の子ステラはある日つぶやきます。「お母さん、この古いバスは②浜辺に打ち上げられた鯨みたいだわ。」停滞状況を変えるのは、見捨てられていたモノがタカラモノに見える瞬間です。バスを鯨と見立てた子どもの想像力！まちの人々も古いバスのまわりに集まってきてつぶやきを発し始め、人々がつぶやきを交わすと、まちも活き活き動き始めます。つぶやきというスポンティニアス（自発的）な心の動きが互いに響きあう時、人もまちも変わっていくのです。

ステラはバスの中に足を踏み入れ、「これは私たちのものになるかも」。③予感に満ちた子どもの言葉には、状況を内側から変える不思議なチカラがあるのです。ステラのお母さんと周りの人々は、バスをステラの家の前庭に移動させます。

家に帰ってきたお父さんは、敷地からはみ出して置かれたバスを見て「キソク（regulation）に触れるかも知れないね？」ステラは「バスはここでは、こうしか置けないのヨ。これが私のキソクなの」と。大人はキソクに上からしづめられがちですが、子どもは④状況に相応しい下からの調整を my regulation 「私なりのキソク」と敢然と云うのけます。常に基本から問い直す、まっすぐで自由な感覚にあふれるステラの言葉にハッとさせられます。

次の朝、ステラは窓の外を眺めて驚きます。これまで誰も座ったことのないところに近所の子どもたちが座っている。バスの車体の下には何人も幼い子どもたちが戯れている。庭に、古いバスという異物が置かれたことで、その空間が親密で柔らかい場所に変わる。捨てられた古い異物が、ある空間と結びつく時、そして人や生物と結びつく時、再生される。くたびれて廃棄せざるをえなかった無機的なモノが、子ども・大人・カタツムリ・スズメ・雑草たちによって、生命はずむ有機的な場所の中で蘇っている。

きます。

劣化して捨てられたモノを蘇らせるためのキーワードは settle in (落ち着きのよい場所に置くこと) です。再生とは、モノでも建築でも、それを落ち着きのよい場所に、ヒト・モノ・イキモノの関係の中に、置き直すことなのです。東日本大震災からの東北復興における「ふるさと再生」も、まさに暮らしの風景があるべき場所に settle in (腰をすえる) ことなのだと思います。

暮らしと仕事の営みがあるべき場所で紡がれ、風や土や草とともにしなやかに回復する中で、災害「復旧」を越えてふるさと再生への settlement (問題解決) がなされるなら、その時こそ「災害」という「負債」が settle up (精算) されるのです。

あの絵本の物語りに戻りましょう。その晩、ある青少年たちのバンダリズム (環境破壊) でバスは落書きされます。真夜中、ステラのお母さんは出ていってこういます。「⑤あんなたち、私にはいいアイデアがあるのヨ。明日ここにまたおいで。あんなたちの力でこのバスをピカピカにできるのヨ」と。翌日、青少年たちはステラの下書きした絵を見事にバスのボディ全体に描き上げました。

ここには、⑥悪さをする青少年を禁止の世界に追いやるのではなく、人間がもつ表現力を積極的に活かす「修復的实践」が示されています。悪事や犯罪に足を踏み入れる若者たちに向き合い、懲らしめではなく、本来の表現力や善行の力を引き出す「修復的正義」という考え方があります。このことを地域の思いやりの関係のなかで、即ちコミュニティの力で、実践すること、それが「修復的实践」です。

まちの人々が役立つものをいろいろ持ち寄り、古いバスには活き活きとした生活が戻ってきました。生活が戻る＝再生とは、ハイハイする赤ちゃん、笑いあう人々、ケンカする子ども、犬をなでるおじいさん……人々の集う場が準備される、若いカップルが出会う、*幻燈会がひらかれる等々、多様な人々のふるまいが次々と湧き出す状況づくりのこと。この捨てられた古いバスも、多世代の人々のゆるやかな出会いと交流の安心居場所として再生され、「まちの縁側」となりました。

さてある日曜日の朝、バスのまわりでは音楽が流れ人々が踊り、ピクニックのように笑い声がさんざめいていましたが、突然レッカー車があらわれました。産業廃棄物処理場のボスは言います、「バスをクラッシュャーでつぶせ」。ステラの頬は燃えるような赤い色に染まりました。

彼女はポケットの中のカタツムリと共に、怒りに心を震わせながらも、冷静にボスに提案します。「すみませんが、あなたとフットボールゲームをやりたいのですが。もし私が勝ったら、バスは私のものです。」「なぜバスのために前とフットボールゲームをしないといけないんだ?」とボス。「⑦バスのエンジンにスズメが巣をつくっているからです」とステラ。ゲームで勝利をおさめたステラがバスに駆け寄ると、スズメのヒナが誕生していました。処理場のボスはつぶやきました、「バスが安心できる場所に移せてよかったナ」。

突然のトラブルに機転をきかせた子どもの知的直観力は、不安に満ちた現代社会を生きる私たちにとって、きわめて*示唆的です。ステラは絶体絶命のピンチに追いこまれても、ひるむことなく自らの得意技で対抗し、乗り越えていきます。機転をきかせ、*必死のパッチで打ち勝つ力はどこに由来するのでしょうか。

それは、生の価値への深い思い入れではないでしょうか。ステラの生の価値、すなわち何よりも大切にしていることは、小さい生命への共感であり、それは、ライフ・生命・生活がたがいに具体的なつながりの中にある、という精神の根拠を持っています。その根拠を希望と呼ぶとすれば、希望とは、自分が生の輝きと共にあることに最大の価値をおくことから生まれる力でしょう。何を目指して生きるのか、という方向感覚として、この希望をもっていることは幸せです。精神の拠り所であるこの希望が破壊されるようなトラブルに直面した時、そのトラブルを生 드라마に変える力こそ、想像力です。この想像力とは⑧劉にほかなりません。なぜなら想像力とは、他者の内的経験を自己のそれとして思い描き、主体的に受けとめる能力のことだからです。

⑨絵本は想像力というコミュニティビタミンの源泉です。思いがけず、コミュニティビタミンなる言葉が飛び出しました。人間身体にはビタミンがなければ生命活動の維持ができないように、ひとと地域も、活き活きとした活動を開始・維持・持続するた

めの触媒として「コミュニティのビタミン」が必須ではないかと思えます。

生命へ想いを巡らせ、「生きる意味」をさぐりあてる想像力が、トラブルをドラマに変える力となります。生きる意味とは、「今、ここ」で「ほかならぬお前」がなすべきだ、という一回限りの「時の要請」です（諸富祥彦著『「夜と霧」ビクトール・フランクルの言葉』コスモス・ライブラリー）。⑩この一回性の判断は、生命への想像力からやってきます。絵本は、外的状況の絶望を希望の始まりに変え、トラブルをエネルギーに変える想像力の源なのです。

（『まち再生の術語集』 延藤 安弘）

「注」 * 幻燈会Ⅱフィルムやガラス板に描かれた絵や写真を映写機で上映して楽しむ会。

* 示唆的Ⅱそれとなく示す様子であること。

* 必死のPATCHⅡ関西方言で「とことん粘り強く状況に挑戦する態度」のこと。

問一 ー線①「行き先表示は、なぜかガムテープで『天国』について、どのような意味の「表示」だととらえられますか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア このバスが、多くの乗客を乗せて役に立ったので、人々から愛され続けていたことを示している。

イ 街中で利用されたバスではあったが、乗り物としては、もはや廃棄される運命にあることを示している。

ウ このバスが、乗り物として活躍したことを生かし、新たな役割が与えられることを示している。

エ バスの持ち主がかなりの節約家だったため、修理もされず酷使されていたことを示している。

オ 不思議な表示で通行人を困惑させ、バスを勝手に私物化できないようにしていることを示している。

問二 ー線②「浜辺に打ち上げられた鯨」というステラの言葉に込められた意味として、適当なものを次のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 命を失って放置された巨大なもの。

イ 世の中に深いうらみを持つもの。

ウ 動物に見えるが、実は機械の力で動くもの。

エ 工夫しだいで様々な活用ができそうなもの。

オ 誰もが不快な思いをして、避けて通るもの。

問三 ー線③「予感に満ちた子どもの言葉には、状況を内側から変える不思議なチカラがあるのです」とありますが、「予感に満ちた子どもの言葉」が持つ、「不思議なチカラ」とはどのようなものですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人々に、困惑に満ちた事態の中で、最も安定した收拾の方向を直観的に見定めさせる力。

イ 大人に、子どもらしい愛らしさで、どんな場当たり的な発想でも受け入れさせてしまう力。

ウ 人々に、経験の量ではなく、生まれながらに備えている個々の才能によって、よい解決策を見出させる力。

エ 人々に、世の中の向かう方向について、子どものように新鮮な感覚で的確に察知させる力。

オ 大人に、子どもの無責任な言動に対して、自分ならどうするかと考えさせ、正しい判断をさせる力。

問四 ―線④「状況に相応しい下からの調整」とありますが、「調整」によって何ができるのですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 目上の人の判断に対して、素直に目下の者が従っていくということ。

イ 既成の常識に対する反抗を原動力として、新たな世界の秩序を作り上げること。

ウ 現実に対する適切な判断を土台にして、自分のなすべきことを見出し実行すること。

エ 社会の下位層の意見を上位層の人間が的確にとらえることで、正しい規則を作ること。

オ 社会の実態を、個々の人間の自由な発想の集合体としてとらえること。

問五 ―線⑤「あなたたち、このバスをピカピカにできるのヨ」と述べた母親の言葉は、何が可能になるということの具体例と言えますか。本文中から五字で探し、抜き出さないさい。

問六 ―線⑥「悪さをする青少年を禁止の世界に追いやる」とありますが、―線⑤の母親の発言が、「禁止の世界に追いやる」姿勢のものに変化した場合、どのようになると思われますか。せりふの形で答えなさい。

問七 ―線⑦「バスのエンジンにスズメが巣をつくっているからです」という返答をステラが即座に行ったのは、彼女の中のどのような思いに純粋に従ったからです。本文中から十二字で探し、抜き出さないさい。

問八 ―線⑧「愛」とありますが、本文から読み取れる「愛」の説明として、最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 話したいことがある人の思いを誠実に受け止め、自分を押し殺してでも耳を傾ける能力。

イ 相手の求めるところを直感的に理解し、必要なものを分け与えることができる能力。

ウ 必要とあらば、自分の前にいる人に注意を与え、しかし不愉快な思いをさせない能力。

エ 自分の存在する社会の本質を理解し、それに相容れないものを正しい道に導く能力。

オ この世に生きている全てのものの思いを自分のものとしてとらえ、心を働かせることができる能力。

問九 ―線⑨「絵本は想像力というコミュニケーションの源泉です」とありますが、「絵本が源泉になる」とはどのようなことですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 絵本は、おのずから周囲の人を招き寄せ、豊かなコミュニケーションを営む契機になるということ。

イ 絵本は、他者の思いを自らのものにする力を豊かにして、個人や地域に活力を与えるということ。

ウ 絵本は、人と人がコミュニケーションを結ぶ際の、基本的な心構えを伝える効果があるということ。

エ 絵本は、人間同士の関係の中で見失いがちな、個人の楽しみを見つけ出させるということ。

オ 絵本は、自分自身の生がどうあるべきかを考える自己探索の出発点になるということ。

問十 ―線⑩「この一回性の判断は、生命への想像力からやってきます」とありますが、これはどのようなことですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 生きとし生けるもの同士の共感の中で、与えられた状況の下、今自分のなすべきことが自然に見えてくるということ。

イ 自然の中で生かされているという感謝の思いがあれば、逆境の中でも正しく判断できるようになるということ。

ウ この世に生を与えてくれたものの言葉にただ耳を傾けることから、生を与えられたものの運命が切り開かれるということ。

エ 今日二度と来ないという覚悟があつてこそ、生を与えられたものの義務を理解できるようになるということ。

オ 生まれ育った環境を理解し活かすことによって、今ここで何をなすべきかが想起できるようになるということ。

問十一 本文の内容として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 地域社会の充実を宣伝する題材として、絵本の中で語られるエピソードは有効な手段となる。
- イ 自己の生命の価値を最大限に発揮しようとする個人の意志から、社会全体の成立に必要な活力が生じる。
- ウ 生命を持つものの同士の連帯に支えられてこそ、危機的な困難を希望とともに乗り越えることができる。
- エ 一生に一度限りの試練をくぐり抜けて、初めて人はこの世に生まれてきた意味を見出すことができる。
- オ 自己の経験に照らし合わせ、他者の立場を理解してあげることが、社会を成立させる愛の根源となる。

二

次の文章を読んで、後の一から十二までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

ひろみはメール上ではナナ。不登校で、パソコンだけが外に開かれた唯一の窓。奄美の加計呂麻島にいるメル友のケンムンからの誘いで、祖父母に行き先だけを残し、東京からここにやってきた。島では船を降りた港で偶然出会ったサヨの家に身を寄せた。その晩、村の食堂にサヨと行くと、集まっていた大勢の島の人たちがひろみに親しげなまなざしを送ってきた。みんなで三線に合わせて歌を歌い続けた。翌朝、目が覚めるともう陽は高かった。

サヨが出かけたあと、ふろ場をのぞいてひろみはちよつとちゆうちよした。ふろ釜はせまくて深かった。洗い場は小石をしきつめただけのもので簡単なシャワーが壁に吊るされてあるだけだった。

ともかくも決心して入ろうとして困ったのは脱衣だった。家全体が開放されて、だれかが来ると外からまる見えの状態だった。

思案したが結局、思い切った。思い切ればかえって愉快だった。

祖父母のしつけはうるさかった。行儀よくしろ、女の子なのだから。きちんとしろ。どこから人に見られても恥ずかしくないように……。

—— ハイハイ、分かってマスヨ。

ひろみは、出の悪い生ぬるい水を浴びながら、そう快な気分になっていった。浴そうのすみにある固い石けんはいつでも泡立ちもせず、いい香りもしない。それでも汚れが落ちていく、すべての汚れがきれいさっぱりと。

少ししか出ない水で頭を洗い、全身を流すとずいぶんと時間がかかった。

学校へいつている時には「におう」ということに極端に過敏になっていた。他人からくさいといわれなかつても気がつかつていた。そのためのシャワー、そのための消臭、そのためにいいにおいの石けんを使った。

今日は、汗を流すためのシャワーだった。①ぬぐってもぬぐっても汗くさかったあのころとはちがって、ちよろちよろしか出ない水ですべての汗くさをぬぐい去った気分になれた。

時計を見ると昼をとうにすぎていた。サヨは帰ってくる気配もなかったので、ひろみは一息入れると周囲を歩いてみたくなった。足がしぜんに*「アダンの村」の方向に向いたが、管理棟にはよらず坂をのぼっていった。

昨日ここを夢中で走ったことが嘘のようだった。

ふと視線を感じてふり向くとだれかが自分を手招きしていた。けげんに思いつつも、周囲には自分しかいないので招きに応じて近づくと、稲江さんの奥さんだった。

「葉っぱがたくさんとれたの。持って帰りませんか? サヨさんの家にいるのでしょ?」

どのように応えてよいのか分からなかった。その間に奥さんは両手にいっぱい菜をかかえ、何か入れものに入れますからいらつ

しやいとすたすたと歩き出した。

仕方なくそのあとについていった。

②畑の近くにある稲江さんの家の門を入ると、ぱっと周囲が明るくなった。

紫やピンクや赤や黄色の花々がすきまもなく咲いていた。大きな木々が緑濃い葉を茂らせていた。

「痛みますか？」

家の中から声がした。

別にのぞき見するつもりがなくとも、四方を開放した座敷は、外からもすっかり見ることができた。

布団がしかれ稲江さんが横たわっていた。かたわらには点滴の器具がおかれ、稲江さんの腕にのびていた。医者の方と看護婦の年子さんが布団の横に座っていた。

ひろみの足が思わず止まった。

奥さんは③気配を察してふり返り、微笑した。

「気にしないで。往診に来てくださってるだけだから」

奥さんの声に座敷の三つの顔が同時に外を向いた。

「やあ。ナナさん」

点滴を受けている稲江さんが最初に声をかけてきた。平静な声音だった。

ひろみはあいまいにおじぎをした。

「野菜を少しもらっていたかどうかと思って、来ていただいたの」

「ああ、それはいい。どうか食べてやってください。わたしたちが一生懸命育てた野菜だ。良子、スモモとつてあげたら？」

「あらそうね。もう熟れてましたよね」

「先生や看護婦さんにもさしあげてくれ」

「ええ」

菜っ葉を新聞紙につつんで出てきた奥さんは、それをひろみに手わたすと、大きなかごを持って庭の木の下に立った。そして最初に木からもらいだばかりの赤紫色の実をひろみの手にのせた。

④ずしりと重かった。

ひろみは困惑して、粉を吹いたような果実をながめるだけだった。すると、奥さんは別にとった実を、エプロンの端でちよつとぬぐって、がりつとかんで、「甘いわよ」と言った。

彼女の頭が白いので年寄りだとばかり思っていたが、動作は軽く見た目より若々しかった。

ひろみも真似をして、Tシャツの端で果実をぬぐいかじってみた。口中に酸味と甘味が広がった。なぜだか、太陽の味だと思った。

家の中へ入ったら、と奥さんはひろみを誘った。が、ひろみは、部屋の様子にためらって「ここでもいいです」と、庭に立ったまままで断った。奥さんは、それ以上無理にすすめることもなく、かごの果実を持って部屋に入ると、医師の方と看護婦の方の年子さんの前においた。二人は何の遠慮もなくすぐその果実に手をのばした。

「あなたも食べますか？」

奥さんがたずねると、

「おれはいい。……みんながうまそうに食べるのを見ているだけで、満腹だ」

と、稲江さんは答えた。

「ずいぶん安あがりだなあ」

シンさんが言うのとみんなが笑った。それから年子さんが庭に目をやってスモモの木をながめながら

「ずいぶんたくさんなっちよるね」と、言った。

「ええ。昨年も今年もたくさん実りました」

「来年もまた実るのだろうなあ。おれは見られないかもしれないけど」
稲江さんがつぶやくように言ったの、⑤ひろみは思わず聞きとがめた。

が、あとの人たちは平気な顔をしていたのでひろみは変な気がした。

稲江さんはさらにつづけた。

「先生、『末期の眼』って知ってますか？」

「何ですか、それ」

「この間読んだ芥川龍之介の『或旧友へ送る手記』に出ていた言葉なんですがね、もう死ぬという時に人間の眼に見えるものはすべて美しいってことだそうです。本当にそのとおりだと感心しました。わたしも今、すべてが美しく見える。何をしてもこれで終わりだと思うといとおしくてありがたい」

「この人ったらいいよ仏さんに近づいているみたいなんですよ、先生。この間だって畑仕事している最中にいきなり、きみといっしょになれてよかった。愛しているよ、なんて土の中のモグラがひっくり返るようなこと言うんですよ」

奥さんがけろりとして言った。

年子さんがわざと目を丸くして、それからくすくす下を向いて笑った。

⑥「こいつはごちそうだなあ」

シンさんも愉快そうに笑った。

(中略)

「そう。わたしは病院の白いベットで薬づけの治療をして、一日のばしの死を迎えるのだけはいやだった。どうせ死ぬのなら⑦」のいい話だが、良子と二人旅をしながら静かに死ねたらいいと思ってた。わたしは病気になるまで勝手気ままに生きてきた。良子が旅行したいといっても、そんな時間を持つこともなかった。せめて最期はいっしょに良子のいきたいといっていたところを旅したいと思ってたんですよ。」

(中略)

「ここへ来てホスピスという意味がよく分かりました。この人とも本当にゆっくりいろんなことを話しました。長い間、夫婦でいても本当は何も分かっていなかった。今はこの人と出会えてよかったと思ってます。⑧先生や土地の人ののおかげです」

奥さんの声はさわやかだった。だが、ひろみは稲江さんの言葉の重みに衝撃を受けていた。「ホスピス」「末期医療施設」という未知の言葉が、今実感をともなうて目の前にあった。

風が吹いた。

ひろみは、はっと「⑨」に返った。とたんに汗が吹き出してきた。

話に聞き入って日ざしの強さを忘れていた。ひさしの影にそろそろと移動していくと、

「やあ、中に入ったら？ 外はもう暑いだろ」

シンさんが目ざとく声をかけた。いっせいに見つめられてひろみはどぎまぎしてよけいに汗が吹き出た。あわててハンカチをとり出し額をぬぐうと、

「いいなあ、若い人は。わたしなど汗線までひからびてる」

稲江さんの声があまりにうらやましそうだったので、

「すみません」

ひろみは思わずつぶやいてしまった。稲江さんと奥さんが同時に笑い出した。ひろみは首筋まで赤くなった。

「いやいや、謝ることは何もないよ」
と、稲江さんが言う

「ほんと。あなたが謝ることなんて何もないのよ。いい人ね」
と、奥さんが目を細めてひろみに微笑した。
ひろみはとまどった。

大人から、こんなに寛大に、こんなにやさしくあつかわれたことがないような気がした。⑩「いい子ね」という言葉は、つねに大人たちの願望の裏返しであった。真面目で礼儀正しくて、勉強のできる子。ひろみはずっと、祖父母をはじめ大人たちの「いい子」を演じつづけて、ある時疲れて動けなくなった。そんな自分を知ったら、この人たちはどんな顔をするだろう。きっと、こんなに無邪気に自分を評価することはないだろうと思いつつ、⑪ひろみは奥さんの「いい人ね」という響きにいつまでも身をゆだねていた気持ちでもあった。

そんなひろみの複雑な思いが何かのはずみで移ったように、奥さんまでがふつと口調を変えてつぶやくように言った。

「わたしもあなたみたいなのがほしかったわ。幸か不幸か、わたしたちには子どもがさずからなかったの。主人には仕事があったけど、わたしには生きがいになるものが何もなかった。いまさら変だけど、あなたを見てると子どもがほしかったな、なんて……」
そして、つと立ちあがると、台所へ姿を消した。

⑫空気が粘つくようになった。

静寂が耳に痛かった。

陽気にふるまってはいても、奥さんの、稲江さんの人生の重みが⑬ずしりと感じられた。

「注」 * 「アダンの村」Ⅱ民宿の名前。

(『まぶらいの島』 竹内 紘子)

問一 —線①「ぬぐってもぬぐっても汗くさかったあのころ」とありますが、本文全体から読み取れる「あのころ」のひろみの様子の説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いつも周囲の反応を気にしていて、本当の自分でいられなかった。

イ いつも人から避けられていて、自然と内気になってしまっていた。

ウ 祖父母に育てられているという引け目から、引きこもりがちだった。

エ 必要以上に自己嫌悪に陥っており、どんどん内向的になっていった。

オ 被害妄想が激しく、自分は人から嫌われていると思い込んでいた。

問二 —線②「畑の近くにある咲いていた」とありますが、この描写はどのようなことを暗示していますか。本文全体を踏まえ、最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ひろみは、周囲の花に少しも気づく余裕がないほど緊張していたが、ここに来たことをきっかけに心が解きほぐれ、誰とでも打ち解けられるようになっていくということ。

イ この島全体が色とりどりの花に囲まれた豊かな自然が残るところであり、そういう豊かさが、ここですばらく過ごすことになるひろみの気持ちを明るくするのにしていくということ。

ウ 丹精込めて花を育てたりしながらこの島で穏やかに暮らすとする稲江さん夫婦の思いに触れ、ひろみが今までの閉じた生活から抜け出して成長していくということ。

エ この島で過ごすことを決意した稲江さん夫婦が、あるがままの自然の中の生活を満喫して、毎日何の不足もなく暮らしていけるようになるということ。

オ 豊かな自然あふれるこの島では空気もよく、人々の気持ちも大らかになっておのずと病氣も治るので、稲江さんの病状もすっかりよくなっていくということ。

問三 —線③「気配を察して」とありますが、ひろみのどんな様子を察したのですか。三十字以内で答えなさい。

問四 —線⑤「ひろみは思わず変な気がした」とありますが、ひろみと、あとの人たちの反応が違^{ちが}うのはなぜですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 稲江^{いなえ}さんの死期が近いことを、あとの人たちは知っているが、ひろみは知らないから。

イ 稲江^{いなえ}さんのつぶやきを、あとの人たちは聞きなれていたが、ひろみは聞きなれていないから。

ウ 稲江^{いなえ}さんが島の恵^{めぐ}みに感謝していることを、あとの人たちは気づいているが、ひろみは気づいていないから。

エ 稲江^{いなえ}さんが木の成長を待ち望んでいることを、あとの人たちは感じていたが、ひろみは感じていないから。

オ 稲江^{いなえ}さんの愚痴^{ぐち}が元氣のもとだと、あとの人たちは認識しているが、ひろみは認識していないから。

問五 —線⑥『「こいつはごちそうだなあ」』とありますが、シンさんがどのようなことを感じて発した言葉ですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 周囲の人たちを和ませている夫婦のやりとりにあやかりたいということ。

イ 難^かしそうな作家の言葉を自分に置き換^かえられるのはすばらしいということ。

ウ 普段^{ふだん}は見えない周囲のものがすべて美しいと感じるのは幸せだということ。

エ 愛情^{しやうかく}いっぱいかけて収穫^{しゆかく}したものをいただいて感謝したくなるということ。

オ 夫が妻に寄せる愛情の話を聞いてほのぼのとし冷やかしたくなるということ。

問六 —線⑧「先生や土地の人のおかげです」とありますが、ひろみもこの島に来て自分の変化に気づいています。この島に来てからの感情を表している語句を、本文中から五字程度で探し、抜き出しなさい。

問七 —線⑩『「いい子ね」という言葉は、つねに大人たちの願望の裏返しであった』とありますが、どのようなことですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大人たちの「いい子ね」という言葉には、演技でもいいから真面目^{まじめ}に過^かごして欲しいという願いが込^こめられているということ。

イ 大人たちは寛大^{かんだい}にやさしい態度で「いい子ね」と呼びかけることが、いい子を育てる効果的な方法だと信じているということ。

ウ 大人たちは実は必ずしも、真面目^{まじめ}で礼儀正^{れいぎ}しく勉強^{めいけん}のできる子ばかりに高い評価^{あたい}を与えているというわけではないということ。

エ 大人たちは子供にいい子でいることを期待し、「いい子ね」と言うことで、知らぬ間にプレッシャーを与えているということ。

オ 大人たちは子供たちが自分たちの寄せる期待に疲れきっているのも知らず、常にいい子を求めては裏切られているということ。

問八 ―線⑩「ひろみは奥さんの『いい人ね』という響きにいつまでも身をゆだねていたい気持ちでもあった」とありますが、なぜそのような気持ちになっっているのですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア かつてのひろみとは違い、今は「いい子」を装っていない自分を純粋に「いい人」と言ってもらえているので、心地よさを感じているから。

イ 常に大人たちの「いい子」を演じていたひろみは、島に来て解放気分浸っているため、「いい人」という評価が皮肉ではない素直なものに聞こえてきたから。

ウ 装っている自分に気づきつつ本心を隠し続けたことを後悔しているが、素直に「いい人」と言われ、過去を拭い去れた喜びを感じているから。

エ 本当の自分を知らない人たちに申し訳なく思う反面、本当の自分になれた島の人に「いい人」と言われるのはうれしかったから。

オ 今まで人から優しくされたことのない自分が「いい人」と言われることに照れくささを感じるが、ここで言われたことを機にいい子になりたいと思ったから。

問九 ―線⑫「空気が粘つくようになった」とありますが、ひろみはこの時何を感じているのですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分は今まで、日々の生活の中でのすり減るような疲れを誰にも理解してもらえないと苦しんでいたが、稲江さん夫婦の苦しみに比べたら大したことはないのだと感じている。

イ 自分は今まで本心を隠しながら生活してきたが、稲江さんのつぶやきを聞いて、誰にでも人には話せない悩みがあることを知り、表面的な付き合いでは理解しあえないことを感じている。

ウ この島に来るまで毎日の生活が思い通りにならず嫌気がさしていたが、稲江さんの人生も同じように満足いくことばかり

ではないことを知り、稲江さんのことを気の毒に感じている。

エ この島には現実逃避してきた人が多いので、島の人たちの思いやりで心が洗われているようでも、実はまだ心の奥底に秘めた悩みを抱えているのが実情なのだということを感じている。

オ 自分の人生に納得しているような爽やかな印象だった稲江さん夫婦にも思い通りにならないことがあると知り、人生のもどかしさを感じると共に、人それぞれの苦悩があることを感じている。

問十 ―線④「ずしりと重かった」、―線⑬「ずしりと感じられた」とありますが、両者の「ずしりと」に含まれる意味の説明として、最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ―線④は、昨日出会ったばかりの人からいただきものをするこに對するひろみの戸惑いを表し、

―線⑬は、明るく生きながらも色々と苦悩を抱えている稲江さんの人生の複雑さを表している。

イ ―線④は、いただきものを素直に受け取ってよいか遠慮するべきかというひろみの迷いを表し、

―線⑬は、出会ったばかりだが稲江さんの人生を知ってしまったひろみの憂鬱さを表している。

ウ ―線④は、まだ状況もよくつかめていない中でどうしてよいかわからないひろみの気持ちを表し、

―線⑬は、稲江さん夫婦の複雑な人生や心境を感じ取ったひろみの気重さを表している。

エ ―線④は、今まで経験したことがないほどの親切の連続にかえって不安を覚えるひろみを表し、

―線⑬は、ひろみを明るく歓迎しているが、内面は苦悩も抱えている稲江さん夫婦を表している。

オ ―線④は、病人や医者や看護婦と共に和やかにすもを食べることに抵抗を感じるひろみを表し、

―線⑬は、末期医療に携わる医者や看護婦の責任の重さや稲江さんの日々の大変さを表している。

問十一 本文全体の表現の特色として、当てはまらないものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア カタカナ表記することで、心のない形ばかりの言葉を他の言葉と区別して表している。
- イ 短文を重ねるなどして、次々と場面が浮かんできて鮮やかな印象になるように表している。
- ウ 擬態語を用いることで、状況や心情・行動が目の前に浮かんでくるように表している。
- エ 過去と現在を繰り返し交互に描くことで、ひろみの心が次第にほぐれていくことを表している。
- オ ひろみが視覚や味覚でとらえたことを描くことで、より象徴的にひろみの内面を表している。

問十二 空らん「⑦」と「⑨」に当てはまる語をそれぞれ漢字一字で答えなさい。

三

次の―線部のカタカナを正しい漢字に直しなさい。

(一画一画でいねいにはつきりと書くこと。送り仮名が必要な場合、送り仮名を含め解答らんに書きなさい。)

- 1 日々シヨウジンする。
- 2 のりが乾いて紙がソル。
- 3 代表者に決定をユダネル。

